

前句

塚原地区に普及について

元禄の中頃に、江戸を中心として、京都、伊勢、尾張、金沢、紀伊等の大藩士には、泰平無事に日を過ごす手段として、盛んに流行したものである。参勤交代を終えて帰国した藩士等が伝え、金沢城下に広がり、幕末頃に越中（加賀藩下）、射水（現在の高岡、氷見を含む）、砺波（両砺波、小矢部）に伝えられ広がったものである。塚原地区には明治の中旬頃に広まった様ではっきりしたことは言えないが、狐の茶袋、第六編を出した三樹亭嶽雲（本名紇山藤吉郎）等により広まった様です。

地区の神社に奉納額について

拝殿の両側に奉納されているが、風雨にさらされて、字が消失しているので読み取ることが出来ないが、寺塚原神社に拝殿内に奉納された額があり、明治16年菊月とあり今でも読むことが出来ます。

前句の樹立について（発祥）

前句付について（長題ともいう）

約500年ほど前、飯尾宗祇という連歌師が時の天皇より花の本の号を賜った、傑物駿河の宗長法師（一休和尚にも参禅した人）、その他肖柏法師、山崎宗鑑等の手に依りて世に文芸的価値を著したが、元禄年間約360年前に至り、前句付と言う様になった。

いっくだて かさだい

一句立（笠題ともいう）

元禄の末頃より流行り出して、寛永の頃大いに振るい、寛延より宝暦（250年ほど前）現在のようになつた。